

GAKKAN GAKUFU  34

コミュニケーションの深淵を追いかけて

橋元良明教授

Interview

社会調査をベースにしたメディアの実証的研究のパイオニアである橋元教授に、最近出されたご著書のこと、現在の研究に至る機縁などを伺いました。「あまり先を考えない」とご自身が語る性格だからこそ、大きな時代の流れの中の“今”を見通されているという印象を受けました。

■新刊『メディアと日本人——変わりゆく日常』(岩波新書)を出されましたが…

この15年のメディア環境の激変を、1995年から最新の2010年まで5年毎に行っている「日本人の情報行動調査」から得たデータに基づいて解明を試みたものです。今回の調査でいちばん感じたのは、ネットの圧倒的な威力です。雑誌は壊滅状態で、新聞も根本から存続の危機にあります。一方、高齢者層ではテレビが安定的に優位を保っています。意外なのは、早くも10代20代でPCネット離れが始まったことです。彼らにとってPCネットは衰退のメディアと言えます。

この本が出た3月に震災がありました。震災時のメディア利用を見ますと、被災地をはじめ停電した地域では、携帯、PC、テレビは使えず、ラジオが役に立ったようです。一方、首都圏では7割がテレビからニュースを得ていました。これは会社員を中心にしたネット調査の結果なので、震災時は会社において手元にパソコンがあったことを考えれば、すごい数字ですね。また、それまで評価が低かったワンセグ放送も20%の人が見ていました。

ツイッターは被災地では使う人は少ないが情報の流通が早く、全世界規模での震災情報の情報発信・拡大に寄与しました。なお、2010年6月時点では、ツイッターの利用者はPC経由で14.5%、携帯経由では8.6%に過ぎませんでしたが、現在では倍増しています。

また、既存メディア離れも見られます。まず一部の人が海外のメディア、ネットサイトで真実を知り、それがコピーで拡大しました。ブログ等で国内の「政府には取り込まれていない」専門家の意見に接し、むしろそちらの方が説得力をもったりしています。記者クラブで仲良しクラブを形成している既存のマスメディアの弱点が露呈し、一般の人々もその限界を認識してきたのだと思います。

このようなメディアの変化によって、私たちの日常も変わりつつあります。ネットのニュースは新聞社やテレビの記者が取材したものに頼っていますので、既存メディアのビジネスモデルが成り立たなくなれば、ネット情報も含め、情報が質・量ともに劣化します。取材体制が貧困になり、記者の質も低下することが危ぶまれます。

■このようなご研究の道に入られるきっかけは？

高校時代、吉本隆明『言語にとって美とは何か』に感銘を受け、大学で言語心理学を専攻し、言語コミュニケーションを研究しました。30才の頃、アイロニー、メタファーの言語行為論についての著書『背理のコミュニケーション』を出しました。20代の助手時代から、並行してメディア利用に関する調査も共同研究として実施し、やがて携帯、インターネットによってメディアが激変した結果、メディアの変化とその影響を追うことに明け暮れています。

時間が取れたら、QOL(Quality of Life)を高めるためのノウハウの研究を進めたいと思っています。やはり「いかに幸福に生きるか」は



すべての科学の最終目標だと思います。特にシニアのQOLを向上させる研究です。そこでメディアがどう介入できるか、阻害要因でしかないかを見極めたいです。それから、『メディアと日本人』に若年層のメンタリティについては若干書きましたが、シニア層のメンタリティ、コミュニケーション、メディア行動については積み残しましたので、次に書きたいと思っています。

■ご著書からは大変きめ細やかで、慎重、堅実な印象を受けますが、日常生活ではいかがですか？

メディア人間ではないし、早くメディア接触を断ち、大好きな猫の言葉を研究したいと思っています(笑)。耳が良くないせいもあって、会議は大嫌いで、人とのコミュニケーションも好きでないのです。だからこそ逆にこういう研究に興味をわいたのかもかもしれません。大学卒業後もよく考えないで先輩に誘われるまま一般企業に入り、2年でやめました。あまり先を考えない行きあたりばったりの人生です。部屋の片づけや資料の整理も苦手。好きなきに寝て、好きなきに目を覚まして、ずっと小説を読んで暮らしたいと思っています。計画通りの堅実な人生など送れない性格だと思います。

中学生から大学生にかけては文学青年で、小説もよく読んでいました。最近あまり読まなくなりましたが、鴉外、三島、松本清張は好きで、再読しています。若い頃よりも無趣味になったと感じていますが、ただ、海外旅行は年2回ペースで出かけています。欧州はロシア、ポーランドを除いて、モンテネグロ、ブルガリアも含めほとんどすべての国を回りました。特に、旧共産圏の国を回って、社会体制が生活、価値観、文化に大きな影響を持つことを感じました。旅は今後も続けたいです。

BIOMECHANICA (ビオメカニカ) —— 河口洋一郎の異形博物誌



7月22日—9月25日の約2ヶ月にわたり、東京大学総合研究博物館小石川分館にて、「BIOMECHANICA (ビオメカニカ) —— 河口洋一郎の異形博物誌」が開催された。

小石川分館は、東大の歴史的な学術標本による「驚異の部屋」なる常設展示を主としているが、他にも現代アーティストとのコラボレーションなど、積極的に新しい取り組みを行っている。

その中で今回は、CG作品のイメージを基に、河口教授が思い描く、深海や宇宙へ連れていくための動くロボット(=巻貝・クラゲ・魚・蝶といった、海や陸の生物から発想を得て制作された立体造形

作品)を中心に展示を行った。展覧会のタイトルでもある、「ビオメカニズム」の一番の特徴はサバイバルすることであり、異形なる容貌は、未知の地での探索に適したように設計されている。

河口教授は、新たな芸術生命体を考える根源的なアイデアを地球の自然、生物の進化に求めている。悠久の時間の流れの中での、生物の独自に進化を遂げた形や色、繊細で奇抜な動きの魅力をどう芸術的に形象化できるのかを考えると共に、5億~6億年前のカンブリア紀から現在に至る、地球の生命進化をたどっている。そこから未来の芸術生命体の進化を考える。この世界観は、小石川分館の展示とまさに相通ずるコンセプトであるだけでなく、新たな異形博物誌をもたらした。

会期中はアーティストトークと題し、杉山知之氏(デジタルハリウッド学長)・廣瀬通孝氏(東大大学院情報理工学系研究科教授)、山口裕美氏(アートプロデューサー)・岩淵貞哉氏(『美術手帖』編集長)、伊東順二氏(美術評論家、プロジェクト・プランナー/プロデューサー)・浦沢直樹氏(漫画家、ミュージシャン)との対談や、西野嘉章氏(東大総合研究博物館館長)とのダイアログも実施され、毎回多くの参加者で賑わい、展覧会をさらに盛り上げた。(特任助教・川喜田千晶)

「ケアのジャーナリズム」とは・・・?



7月23日、福武ラーニングスタジオにて、『ケアのジャーナリズムをめぐって』が「情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構」と林香里研究室「メディア

研究のつどい」の共催で行われた。本研究会は、林教授が今年1月に『オンナ・コドモ』のジャーナリズム—ケアの倫理とともに』(岩波書店)を上梓したのを受けて企画された。研究会の前半では、林教授が「ケアのジャーナリズム」とはなにか」というタイトルのもと、「ケアのジャーナリズム」を、従来のジャーナリズム(研究)のみならず、近代以降のリベラリズムに位置づけながら、その意義、必然性をめぐって講演を行った。つづいて、「ケアのメディア/メディアのケア」というテーマで西兼志助教が発表を行った後、桜井均特任教授(元NHKプロデューサー)を交えて、討議が行われた。桜井氏は、「ケア」を「おせっかい」と「おたがいさま」と捉え返した上で、テレビのドキュメンタリーだけでなく、自身が主催するインターネット上での活動にもその実践といえる側面があるのではないかと指摘した。討議後も、ジャーナリズムやメディアの現場で活動する参加者から質疑が提出されるなど、活発なやりとりが行われた。(助教・西兼志)

メディア・エクスプリモ最終シンポジウム2011 「情報があふれかえる社会」から 「表現が編みあがる社会」へ

「美系・理系・文系」の協働による研究プロジェクト「メディア・エクスプリモ」は、10月1日に多摩美術大学にて最終シンポジウムを開催した。2006年10月に始まった本プロジェクトは、「情報デザインによる市民芸術創出プラットフォームの構築」(JST、CREST)をテーマに、多摩美術大学の須永剛司(研究代表:情報デザイン)、産業技術総合研究所の西村拓一(実世界指向インタラクション)、東京大学の堀浩一(人工知能)と水越伸(ソシオ・メディア論)によって進められ、今年度修了を迎えた。

各グループ長による基調講演では、初期のころは4グループが協働のあり方に迷い、苦しみ、ぶつかり合いながらも、ワークショップなどの実践を重ねることで協力体制ができていったこと、そのなかで一貫して技術システムと文化プログラムの両輪をデザインしてきたことなどが話された。ポスターセッションでは実践例が紹介され、100名余りの観客がそれぞれに展示ブースを回った。コメンテーターの廣瀬通孝(東京大学)と境真理子(桃山学院大学)からは、市民社会と芸術との関係、本プロジェクトの持つ3.11以降の意義や、分野越境型研究としての可能性などが議論された。(特任研究員・鳥海希世子)



Project

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

【gakkan@post311】

学環メンバーの震災後の取り組みを紹介します

シンポジウム「震災から見えてくる 表現のありかた：弱い科学と強い科学」

5月28日、先端表現情報学コースシンポジウムにおいて、強い科学と弱い科学という対立関係を巡って議論した。強い科学とは、生き残るためのサバイバルの科学であり、弱い科学とは、共存とコミュニケーションの科学だ。雪の中だろが敵を目指して強引に進むロボットと、人を癒すロボット。前者が強い科学の、後者が弱い科学の例だ。

アメリカは強い科学を代表する国であり、日本は弱い科学の代表だ。その違いについて3.11が契機となって考えさせられた科学者は多いだろう。強い弱い、良い悪いではない。そして弱い科学こそ本質的に強いものだと思っている。なぜならば、強い科学が国家やら予算やらの外的な規範で動かされるのに対し、弱い科学は個人のための、個人の内的規範で突き動かされるものだからだ。

現代はtwitterやFacebookのおかげで、個人の声がパブリックに届く時代だ。このtwitterの威力もまた震災で明らかになった。だから、「個人個人が世界を引き受ける覚悟を持つこと」それが、弱い科学を動かす力になる可能性がある。シンポジウムではそういう主張をしつつ、アーティストやロボット学者、ICTの専門家を招いて、いろいろと議論してもらった。(教授・池上高志)

被災地の新聞社のネット報道めぐり研究会

6月3日、林香里研究室はことし3回目となる公開研究会「メディア研究のつどい」を工学部2号館で開いた。講師は、仙台市に本社がある河北新報社の佐藤和文メディア局長。「大震災下のネット報道：被災地の新聞社が取り組んだこと」と題し、震災発生から約3ヶ月の歩みを振り返ってもらった。最も会場の関心を引いたのは、被災直後から佐藤氏の部下たちが、自転車で瓦礫の町に繰り出し、見たこと聞いたことをツイッターでつぶやき続けたこと。佐藤氏は「完璧なメディアなどない。新聞など古いメディアとともに、ソーシャルメディアなどを組み合わせ、外部組織とも連携していくことが、地方紙の未来を考える上で重要ではないか」と述べた。(林研博士課程・畑仲哲雄)

臨時災害放送局の多言語ニュースを支援

林香里研究室に集う留学生が中心となり、宮城県亶理町の臨時災害放送局あたりさいがいエフエム(愛称・FMあおぞら)の多言語ニュース支援プロジェクトに取り組んでいる。きっかけは、手書き壁新聞で世界の注目を集めた「石巻日日新聞」をはじめ、被災地のメディアを訪問するなか、FMあおぞらのスタッフから「地域の外国人にニュースが届けられない」という声を聞いたこと。FM局から日本語原稿を送ってもらい、博士課程畑仲哲雄を中心に留学生ボランティアが手分けして英語、中国語、韓国語の3カ国語に翻訳し、読み上げた音源を届

けている。多言語ニュースは毎日午後1時半から、79.2MHzの周波数で亶理町内にオンエアされている。(林研博士課程・畑仲哲雄)



FMあおぞらを訪問し、インタビューをする林香里教授(左)。放送局は亶理町役場敷地内に建てられたプレハブで、2人の女性が常勤スタッフとしてボランティア活動をしている。

シンポジウム『映像の中の<東北>』

7月16日、福武ラーニングシアターにて、シンポジウム『映像の中の<東北>』が「情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構」と「放送人の会」の共催で行われた。まず、桜井均特任教授(元NHKプロデューサー)が、67年にNHKが制作したドキュメンタリー『和賀郡和賀町〜1967年・夏〜』を起点にして、テレビで東北がいかに表象されてきたかを、さまざまなドキュメンタリー番組からの映像をもちいて紹介した。続いて、石田英敬学環長の司会のもと、桜井氏に加え、今野勉氏(「放送人の会」代表幹事)、

藤久ミネ氏(放送評論家)を交えて、震災後の状況をめぐって討議が行われた。討議後も、会場と活発な質疑応答が行われるなど、盛況のうちに幕を閉じた。(助教・西兼志)



国際シンポジウム「東アジア安全共同体を 目指して—エネルギー・リスク・ガバナンス—」

東日本大震災と原発事故をはじめとする危機とリスク、エネルギーと安全の問題を東アジアにおける地域主義的な展望のなかで考える国際シンポジウムが情報学環現代韓国研究センターの主催により、7月18日、福武ラーニングシアターにて開催された。

石田英敬学環長からの開会挨拶の後、センター長姜尚中教授による基調講演で、旧来の「安保」問題を東アジア地域の「安全」問題としてとらえなおす意義が強調され、ラウンドテーブルでは木宮正史教授の司会のもと、日本、韓国、旧ソ連の専門家による現状報告と、今後のエネルギーとリスク管理の国際的協力のあり方についての議論が多角的な観点から提示され、討論された。(特任助教・鄭鎬碩)



夏季入試合格発表

9月2日、平成24年度修士課程・博士課程入試(夏季募集・平成24年4月入学)の合格者発表があった。修士課程の志願者数は昨年度並みの214名、今年度から一部コースで夏季募集を開始した博士課程の志願者数は11名であった。最終合格者数は下表のとおり。

修士課程 最終合格者数	
社会情報学コース	18
文化・人間情報学コース	28
先端表現情報学コース	30
総合分析情報学コース	11

博士課程 最終合格者数	
先端表現情報学コース	1
総合分析情報学コース	2



シンポジウム開催予告

情報学環附属社会情報研究資料センターでは、11月26日に福武ホールにおいてシンポジウム「研究者資料のアーカイブズ— 知の遺産その継承に向けて」を開催します。シンポジウムでは、情報学環における小野秀雄(新聞学)、坪井正五郎(人類学)、新領域創成科学研究科における平賀譲(工学・第13代総長)、東京女子大学における丸山真男(政治学)、その他の事例を

紹介した上で、各プロジェクトの関係者が、研究者資料のアーカイブズが担うべき役割や課題について議論を行います。研究者資料のアーカイブズに焦点を当てた国内では初の試みとなります。ぜひお越し下さい。詳しくは <http://www.center.iii.u-tokyo.ac.jp/> まで。(特任准教授・研谷紀夫)

受賞報告

●竹内文乃助教が、日本計量生物学会誌「計量生物学」に掲載した論文「Monte Carlo Sensitivity Analysis for Adjusting Multiple-bias in the Longitudinal Cardiovascular Study」によって、6月3日、同学会より奨励賞を受賞。観察研究・疫学研究の結果は、しばしば研究によってかなり食い違い、その原因の一つに各種バイアスの影響を受けることが指摘されているが、この研究では複数のバイアスの影響を同時に考慮して定量的に評価する方法を拡張・適用したものである。同賞はこの分野での若い研究者の育成と、研究の発展・拡大に役立つことを期待して創設されたもの。

●山口いつ子准教授の著書『情報法の構造— 情報の自由・規制・保護』(東大出版会、2010年)が、「第三回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞」を受賞し、6月12日に早稲田大学で開催された同学会総会の場で表彰された。この賞は2年に一度、マス・コミュニケーションならびにジャーナリズム研究に大きく寄与した作品に贈られるものである。

●佐藤朝美助教が構築したオンラインコミュニティ「親子de物語」が、NPO キッズデザイン協議会主催第5回キッズデザイン賞「ソーシャルキッズサポ

ート部門」を7月8日に受賞。物語創作を通じて親子のコミュニケーションの過程を記録し、発育に必要な言葉がけを学べるWebアプリケーションで、ほかの親子の事例を参考にできるなど言葉の発達と会話の関係を科学的に解明しようという意欲的試みである点が評価された。

●世界最大のコンピュータ・グラフィックス学会ACM SIGGRAPH2011が8月7日～11日、バンクーバーで開催され、松井勇佑(M1・相澤研)がInteractive Manga Retargetingという題目で行ったポスター発表がACM

Student Research Competition 3rd Placeを受賞した。

●加藤亜由美(M1・森研)が2011年Googleアナタボグ記念奨学金でファイナリストに選ばれ、8月9～12日に中国の北京で行われた交流会に招待された。この奨学金は、女性がコンピューティングとテクノロジーの分野で卓越し、ロールモデルやリーダーとして活躍するよう、奨励することを目的としている。今年は、アジア地域からは15人が選ばれ、中国のGoogle Officeで行われた交流会に招かれた。

人事異動

教員	配置換(転入)	7/1	五十嵐 健夫 教授	(情報理工学系研究科より)
	任期満了	7/31	南後 由和 助教 米倉 将吾 助教	
事務職員	配置換(転入)	7/1	矢野 雅彦 専門員 羽田 智紀 総務係長	(分子細胞生物学研究所より) (国立科学博物館より)
	配置換(転出)	7/1	山下 信一 副事務長 大坪 一郎 専門員	(分子細胞生物学研究所へ) (本部人事企画課へ)
	在籍出向	7/1	増田 佳代子 係長	(東京国立博物館へ)

着任教員自己紹介

五十嵐健夫 教授



情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻から流動教員として移動してきました。専門は、ユーザインタフェースおよびコンピュータグラフィックスです。コンピュータを使いやすくする技術や、視覚的情報を利用したコミュニケーションを豊かにするための技術などについて研究を行っています。最近、ロボットのためのユーザインタフェースや、家具や衣服のデザイン支援といったテーマにも取り組んでいます。よろしくお願ひします。

Books

『「フクシマ」論 原子カムラはなぜ生まれたのか』

開沼博 著 / 青土社 2011年6月



本書は福島原発の(3・11間際までの)状況や歴史を検討の対象としているが、そこで明らかにしようとしているのは「日本の戦後社会における成長とはなんだったのか」という問いへの答えだ。福島第一原発の事故は日本社会を大きく揺るがした。しかし、そこで明らかになった問題は、今急にはじまったことではなく、実は戦後社会が抱え続けてきた問題そのものであり震災を契機に顕在化したに過ぎない。そこにあった歴史とメカニズムを明らかにすることがこれからの社会を考える上で重要な視座につながるだろう。

『大学とは何か』

吉見俊哉 著 / 岩波新書 2011年7月



激変する今日の大学で、今必要なのは大学の再定義である。教育学者の制度論でも、学長経験者の経験談でも、ジャーナリストの状況論でもなく、さらには「教養」復活を訴える後ろ向き議論でもなく、ポスト国民国家時代の大学像に向けたメディア論的な大学概念を構想する。そのために中世西欧都市での大学誕生から近世におけるその死、近代国民国家を基盤とした復活、さらには帝国日本によるその移植と戦後改革の壮大な歴史を俯瞰し、未来の大学概念を構想するためのヒントを浮上させる。

編集後記

今年度から編集メンバーに加わらせていただきました。寄せられる多岐に渡る話題やニュースに接し、まさに熱帯林に例えられる学環の多様性を実感しています。特に3.11以降の、情報やコミュニケーションの意味を再考する学環の取り組みや、毎号のインタビューで先生方のご研究の背景や深層に触れることができ、自分にとっても大きな学びです。紙面の都合ですべてをご紹介できないのが残念ですが、エッセンスを味わっていただければ幸いです。(た)

